

教師を失った生徒たち

——ギッシングの描いた女性たち——

北條 文緒

(一)

女性にたいする作者の異常なまでに濃密な感情が、ジョージ・ギッシングの作品を支配している。呪い、怒り、嫌悪が、憧憬、愛、同情と表裏一体となって、独特の重苦しさを生んでいる。

彼の伝記を辿り、二度の惨憺たる結婚生活について知れば、作品から受ける印象の具体的根拠は裏付けられるけれども、たとえそうした予備知識を持たなかったとしても、男女の葛藤を描くときの作者が冷静な分析者の眼をおしでではなく、体験者の言葉を使ってストーリーイを語っていることは、そうでない他の作家の作品とくらべたとき歴然とする。

例えば彼の比較的後年の作品『渦』(The Whirlpool, 1897)を、女主人公が辿る破滅の運命に共通性をもつ『ボヴァリー夫人』とくらべて見よう。⁽¹⁾結婚生活に幻滅を感じたエンマ・ボヴァリーの姿がこんな風に描かれている。

「もう読むものはすっかり読んでしまったし」と彼女はつぶやいた。

そして火箸を赤く焼いたり、雨が降るのをじっと眺めたりして過した。(菅野昭正訳『ボヴァリー夫人』集英社
界文学全集による。以下同断。)

こうした明晰さは『渦』のなかにはほとんど一行もない。女主人公アルマの倦怠は、必らずといってよいほど、アルマの夫ハーヴェイ・ロルフの不安とないまぜにされ、どこまでがアルマの倦怠で、どこからがロルフの不安なのか見きわめがたい混沌とした形で示される。妻の倦怠や焦立ちに悩まされる点は、シャルル・ボヴァリーとて変りはない。ハーヴェイ・ロルフにくらべて、より素朴で無智なシャルルの方が、むしろ出口のない苦しみ方であったにちがいない。しかし作者はエンマにたいしてそうであったように、シャルルをも充分にへだたった距離から観察する。

シャルルは診察室に逃げていった。そして仕事用の肱掛椅子に腰をおろし、机に両肱をついて、骨相学用の髑髏の下で泣いた。

ハーヴェイ・ロルフを描くとき作者ギッシングは、決してこのような距離を置くことができない。

日々彼は自分にむかって、彼女がその野心を失ったことに満足しているのだろうかと問うてみて、何の確信も持てなかった。現在の彼女の健康状態では、彼女が単調な生活に甘んじているのは当然だろう。だが次の数ヶ月が終り、彼女が再び意のままに動き回れるようになったとき、彼女の心は今と同じ状態にいるだろうか。彼女は幸せではなかった。そしておそらく幸せにしてやれる手だてを彼は持っていなかった。男にとっても女にとっても結婚はめったに幸福を意味しない。それが耐えられないほどにひどいものでないならば、人は運命に感謝し勇気を出さなければならぬ⁽²⁾。

妻の気配をはらはらと見守り、思い悩むハーヴェイの心理に作者は終始寄り添い、やがては作者が自身の述懐を語っているかに聞こえる。

勿論作品の根底に作者の切実な心情があることは、作品を損いこそすれ、決してその出来のよさを保証するものではない。しかし例えば『ボヴァリー夫人』の明晰さとは対照的な重苦しさに閉ざされたギッシングの作品のなかにも、われわれに訴える人間の姿が読みとれるとしたら、体験者としての作者が持ついはば社会史的次元での証言と、小説家としての彼がその時代の小説作法のなかにそれを織りこんだその仕方を眺めることは、重層的な興味を喚起するだろう。ギッシングの残した二十数篇におよぶ作品のうち、彼の作家としての活動のピークに書かれた数篇を中心に、彼の描いた女性たちをその社会的コンテキストで眺めると共に、英国小説史のなかで位置づけてみようと思う。

(二)

社会からの疎外という状況が、ギッシングの作品の世界の核を形成していることは、ギッシングを論じる際に、誰もが認識する事実だが、女性に対する彼の苦い思いも、その疎外感の一側面であった。教育も知性もありながら、それに見合った経済的条件も階級的足場も持っていない青年を彼はくり返し小説の主人公にしているが、それが作者の分身であることは言うまでもない。そのような青年は自分の交際範囲のなかに、好ましいと思うような女性を見出すことができない。よしできたとしても結婚の相手に望むべくもない。教育のある女性たちは、そうした青年と貧乏を共にしてくれようとはしないからである。⁽³⁾ 彼が相手にできるような、より下層の女性たちは、無教養で下品で低俗で物欲のかたまりで、たまたまかわりを持った場合には、彼の人生を台なしにする。

例えば『階級のない者たち』(The Unclassed, 1884)に登場するハリエット・スメイルズはそんな女の代表であ

る。店員の生活に飽きて結婚が最も安楽な道だと考えた彼女は、手管を弄して従兄のジュリアン・キャステイを彼女と結婚する破目に追い込む。誰もいないからとジュリアンを無理に自分の下宿の部屋に通し、二人でいるところをわざと他の下宿人に見られるようにする。そのあとその下宿人の告げ口のために下宿を追出されたと言ってジュリアンに泣きつき、三文小説からたつぷり仕入れた溜息や仕ぐさで心優しいジュリアンに罠をしかけてゆく。

結婚後、ジュリアンは親友にむかってこう嘆く。

「僕くらい辛抱強い寛大な夫がいたとは思えないよ。僕の収入で何とかできるものなら何だって与えてやっている。僕が彼女を見下していると思われたいけないから、僕の昔からのささやかな楽しみは全部やめてしまったよ。僕が本を読んでいると不機嫌になるから、家じゃほとんど本を開くこともない。いつもいつも彼女を喜ばせようとできるだけのことはするんだ。そのお返しに何をしてくれるか？ 僕にできるはずのないことを——芝居に連れてゆけど、新しい洋服を買えだの、友だちやつき合う相手がほしいのと不平の言いどおしさ。僕がこうしたいと口に出して言おうが、それが解っていようが、僕の気持なんかより彼女にとっちゃ、自分のほんの小さな気まぐれの方が大事なんだ。あいつは僕に際限なく惨めな思いをさせるとわかっていることを、わざとするんだ。」⁽⁴⁾

こうした生活のなかで身心をすりへらしてジュリアンはついに結核で死ぬ。

ハリエット・スミイルズのような階層の女性にたいして、一昔前の英国教会はよりきびしい宗教的感化力を持っていただろう。あるいは一昔前だったら、店員という仕事のかわりに、家事使用人として働くこともあり得たかもしれない。その場合には周囲からの監視の下に置かれただろう。しかしこの作品の背景となっている一八七〇年代には、

ハリエットのような娘が、ロンドンで束縛のない下宿暮らしをすることが可能だった。家事使用人という身分が不人気になってゆく一方で、都市⁽⁵⁾における商店の増加が生んだ店員という職種が娘たちをひきつけた。教育の普及が、彼女たちに店員がつとまる程度の、また三文小説が読める程度の、リテラシーを与えてもいた。教育がますます低俗さの風潮をひろめているとギッシングは或る手紙のなかで言っているが、ハリエットのような女性たちも疑いなくそのシニカルな感想を促している。

『階級のない者たち』のなかでハリエット・スメイルズは主要な登場人物の一人だが、ギッシングはその後の作品にもこのタイプの女性たちを、主に傍人物として多く登場させている。例えば『女王即位五十年祭の年に』(In the Year of Jubilee, 1894)のエイダ・ピーチ、『イザベル・クラレントン』(Isabel Clarendon, 1886)のボルト夫人。その一方で彼は、評論『チャールズ・デイケンズ』において、デイケンズが描いた「愚かな、滑稽な、不愉快きわる」下層中産階級の女性たちに注目している。

辛辣な気質、とめどなく愚痴をこぼし、ほしいままに無礼な口をきくのが彼女たちの特長である。彼女たちの本当の仕事は、まわりにいる全ての人間をあたうるかぎり不快にすることである。彼女たちはきまって無知で教育がなく、しばしば極度に愚鈍⁽⁷⁾である。

これはデイケンズの描いた無知な女性たちの解説である以上に、ギッシング自身の苦い思いの吐露であろう。この評論が書かれた時期は、彼の二度目の結婚が破綻した時期でもあった。最初の妻がアルコール中毒で死んだ後、教育のある女性は貧乏を共にしてはくれないと見切りをつけて、彼は「ワーク・ガール」の一人とやや行き当りばったり

に結婚したのだ⁽⁸⁾が、妻エデイスは彼の期待をことごとく裏切った。ハリエット・スメイルズはその作品が書かれた時期から言つて、最初の結婚の産物だったが、ジュリアン・キャステイのなめた苦しみを、作者自身はさらにひどい形でもう一度なめたのだった。ディケンズはこうした「厄介者^{ベスト}」たちを実地の観察から描いたにちがいない。いくら天才でも頭で考えてあのように書けるものではない、とギッシングが評価するとき疑⁽⁹⁾いなく「厄介者」たちとの彼自身の体験が評価の尺度として存在している。

しかしディケンズの迫真性への熱っぽい賞讃にもかかわらず、女性たちに焦点をあてた場合の二人の作家の世界の差が、むしろ今の場合にはよい手がかりを与えてくれるように思われる。その差が時代の差であることをギッシングは幾分か意識している。例えば余儀なく独身でいる女性たちにたいして、ディケンズが苛酷であることを指摘してこう述べている。

現在では事態は異なっている。自分の撰択によつて独身でいる女性は普通に見かけるし、彼女たちの少なからぬ者が世の中でよい仕事をしている。六十年前には、ある年令に達した独身の女性は陰に陽に嘲笑⁽¹⁰⁾の的だった。

『ピックウィック・ペーパーズ』の未婚の叔母さんレイチェルや、『ドンビー父子商会』のトックス嬢を思い出すまでもないだろう。後述するようにギッシングの小説『はんば者の女たち』(The Odd Women, 1893)には独身女性の問題への彼の関心が表われており、そのことだけでも事態が六十年前と違うことは明らかだが、その違いはギッシングが意識していた以上に大きかったことを強調したい。先に述べた低俗無知な女性たちを素材にして、ディケンズが笑いをかき立てたことを、彼の偉大な喜劇的才能の一部として、ギッシングは賞讃する。しかしその喜劇化さ

え、独身女性の扱い方とは別の次元で、女性問題が一般の関心にいまだのぼらない時期の作家であつてはじめて可能だったのではないだろうか。

考えてみると、「ギッシングは書いている」このような言いようのない災いが、芸術家によつて、楽しい笑いをかき立てるものになるというのは何と不思議なことだろう。実際にはこうした女たちは測りがたい不幸を生んだ。そうした側面を描かないのはディケンズの方法の特異性で、ある観方からすれば勿論欠陥だが、彼が人生をユーモラスに扱つたことと切り離すことはできない。⁽¹¹⁾

喜劇化がディケンズの方法の特異性であれ、彼の才能の質であれ、それを支える前提としてここにもディケンズの確固たる男性支配主義とも言ふべきものが存在しているのではないだろうか。ディケンズの世界では、呪わしい女たちは、いはば片隅に封じこめられている。彼女たちの流す害毒は笑いの対象になり得るほどに、深刻な影響は及ぼさず、まして真面目で善意の主人公（ジュリアン・キャステイのような）の人生を破滅させるようなことはない。善良なジョン・ガージャリーはがみがみ屋の妻ジョージアナに悩まされるけれども、やがて天罰が下るようにジョージアナは不具となつて死に、優しいビディと再婚する。バンブル夫人はバンブル氏を散々な目に会わせるが、これはもとをたせばバンブル氏の身から出た錆である。そんな風に、ディケンズの世界では、女性の支配者である男性としての作者のゆるぎない確信が人物の配置を決めている。売春婦は哀れな末路を辿らねばならず、独り身の女は結婚相手を夢みて愚かな誤りをおかす——小説作法上のそうした常套手段をディケンズはそのまま受けついで疑わなかった。サム・ウェラーを傭うというピックウィック氏の話を、自分への求婚だとバーデル夫人がとりちがえるあのおかしな

場面は、もし結婚相手を得ることが彼女にとってどれほど切実な社会的必要であつたかの認識と同情が作者のなかにあつたら生まれなかつたであろうように、女性たちは殴つて（比喩的な意味で）矯正してゆけるといふ自信が作者にあつてはじめて、愚かな女たちをめぐるあの笑いの数々が生まれたのであろう。ギッシングには認識と同情があり、自信はなかつた。

(三)

ギッシングの認識と同情は、ディケンズの人物設走をどのように変えただろうか。ヴィクトリア朝前期の小説のなかで、最も救いのない運命を興えられた売春婦、ないし身を誤つた女と、独身の女性の扱い方にそれは端的に表れている。

もつともこの二つのカテゴリーの女性たちが、ただ惨めな姿に描かれていると理解することは皮相であろう。ニーナ・オーエルバッハはその近著『女と悪魔』(Woman and the Demon, 1982)のなかで、そうした女性たちのイメージを文学と絵画の領域にわたつて分析し、彼女たちの一見無力な姿のなかに潜在するデモニアックな要素を指摘し、そこにヴィクトリア朝の神話を見ている。彼女の言うように、歴史が神話を生むと同時に、神話が歴史を作つてゆくものであるならば、不幸な女性たちにたいする社会的関心のたかまりは必然の発展だつたと言えよう。売春婦について言えば、すでに一八五〇年代には、彼女たちの救済運動が爆発的に起こっていた。悪に染まり切つて墮落の生活を送る女というイメージにかわつて、悔恨のなかで救出を求めているマグダレン像が社会運動家や文学者たちの意識を支配するにつれて、小説のなかでもそれにふさわしい幸福な運命が彼女たちに与えられるようになり始めた。⁽¹²⁾

前に述べた作品『階級のなない者たち』の女主人アイダ・スターに、ギッシングは、娼婦の前歴を持つ女が幸福な結

婚をするというディケンズの時代にはおよそ考えられなかった結末を与えている。幼くして身よりのない孤児となったアイダが、どのような不可避的な道筋をとって売春婦となったか、そして主人公オズモンド・ウェイマークを愛するようになったとき、いかに努力して更生の道を歩んだかが描かれる。その過程でも例のハリエット・スメイルズのために、盗みの濡れ衣を着せられて投獄されるなどの不幸にあうが、天性の善良さを失わない。

ただしアイダの恋人ウェイマークが迂余曲折を経て彼女との結婚に至るいきさつには、作者の心理について、われわれの憶測を誘うものがある。はじめウェイマークは彼女と結婚という形で結びつくことに疑いを持つ。ギッシングはそれを指していつもパッションという言葉を使うのだが、ウェイマークは自分とアイダ相互の気持の本質が性的索引であることを知っていて、その永続性を疑うのである。パッションが失われて結婚という形骸だけが残ることを彼は怖れる。一方ウェイマークはアイダと対照的に霊そのもののようなモード・エンダービーという女性にも慮かれる。モードに対してパッションは感じないが、彼女となら永続的な知的結びつきが可能で、それ故に結婚は妥当だと考える。そしてモードと婚約する。

その婚約は結局モードの家庭に起きた偶発的事件のために解消され、ウェイマークはアイダのもとに戻るのだが、この二人の女性のあいだでゆれ動くウェイマークの気持の叙述は妙に説得性を欠いている。パッションにたいする不信と恐怖ばかりでなく、なにか他にも理由があつてウェイマークはアイダとの結婚を避けたがつているのだが、作者とウェイマークとの一体性がそれを分析的にとらえるのを妨げている、という印象がある。そしてその憶測を裏付けるかのよう、作者はウェイマークと遂に結ばれる時点でのアイダに、ひとつの大きな変化を設定している。アイダとその母にたいする冷たい仕打ちを悔いたアイダの祖父ウッドストックが彼女を引き取り、死ぬ際に遺産をアイダに残すのである。彼女はその遺産でスラムに住む人々の救済活動を開始する。つまりウェイマークが正式に求婚すると

きのアイダは階級的にぐんと上昇しており、ヴィクトリア朝の多くの小説がそうであるように、彼女が実は本来高い階級に属していたという事実が、彼女のすぐれた資質の説明となるかのように、ここでも読めるのである。ヴィクトリアニズムの残滓であろうか。あるいはアイダとはちがって、決して白鳥になることがなかった下層の女との結婚生活の作者の体験が屈折して反映しているのだろうか。その無智や品性の卑しさが選りよいのない状況に助長されたものであることを理解した上で尚、ギッシングは大会の下層の女性たちに、いかなる手段によっても克服しがたい宿命を見ていたのかもしれない。そうした下層の女性たちはいつもひとつの表情しか持たず、その意味で精神生活と呼べるようなものがなく、それ故に小説の主人公たる資格を失ったにちがいない。

ギッシングはしばしば妙に意図の透けて見える、丁度家族合わせの人物たちのような名前を登場人物につけているが、この場合のウェイマーク（道しるべ）は作者が意図しなかった仕方です。その後の作品の方向を指し示している。「階級のない」青年と、より上の階層に属する女性という組み合わせが、その後の彼の作品にくり返しあらわれるからである。ただし作者はアイダとウェイマークに与えたような幸福な結末を、そうした組み合わせのどの男女にも二度と与えることはなかった。

独身女性の扱い方を見るなら、ここでもギッシングは状況の変化を敏感に反映していた。一昔前は『ピクウィック・ペーパーズ』のレイチエル叔母さんのように、田舎の大邸宅に住む大家族の一員だった中産階級の独身女性たちは、都市化と小家族化の影響で都会で独立の生計を営むようになる。彼女たちが自活せねばならぬ場合の唯一の手段である家庭教師の職業は、供給過剰で劣悪な条件に甘んじねばならず、それでも口があれば幸運だった。一八九〇年には貧しい独身女性の数がロンドンだけで百万人近くに達し、彼女たちの窮状が関心を集めつつあった。⁽¹³⁾『はんぱ者の女たち』のローダ・ナンやメアリー・バーフットは中産階級の女性たちが家庭教師以外の職場に進出できるように

職業訓練をほどこすかたわら、彼女たちの独立意識を高めるべく挺身するが、この設定は一八五九年に設立された女子雇用促進協会から示唆されたものだろうと言われている。⁽¹⁴⁾

ともあれギッシングの作品では、十八世紀以来の常套手段だった戯画化は影をひそめ、例えば『はんば者の女たち』のヴァージニア・マドンのようにアルコール中毒となった女のおぞましい姿を描く場合にも、それが独り暮らしの女性の極度に切りつめた、楽しみのない生活の結果であったことを読者に納得させている。不利な社会的立場に負けず、飛翔する独身の女性たちも描かれている。

例えば『追放の身に生れて』(Born in Exile, 1892)のジャネット・モクシイ。彼女は最終的には結婚をするが、そこに至る長い年月を医学を学び女医として働く。

彼女が立ち去ったあと、近代的な女性に特有の芳香が残った。いかに優雅ではあっても単なる女性の香水とは全くちがって、それはさわやかで、人を元気づけた。⁽¹⁵⁾

解放された女性をぎすぎすした魅力のない姿に描く傾向が当時まだ支配的だったことを思い合わせると、こんな箇所にはアンダーラインしておきたい。

しかし——アイダとウエイマークの場合と同様、ここでも最後にしかしと言わねばならない——さわやかな香りをただよわせた近代的女性が、女性解放の意識をもった男性と出会い好意を持ち合ったとき、そこに約束されるかに見えるハッピー・エンドを作者は与えなかった。その典型的な例は『はんば者の女たち』のローダ・ナンとエヴァラー・ド・バーフットであろう。

その転落が不可避のものだったことを理解して、娼婦であった女にも幸福な結婚をさせ、独身の女性にもはばたく翼を与えることで、彼女たちをそのじめじめした境遇から救い出した。また救いようのない下層の女性たちの低俗さは作品の中心から除外して、主人公たちの相手にはより上流の洗練された女性たちを設定した。その上で尚、ギッシングの女性たちに残る不幸とはどのような種類のものだろうか。

(四)

教育はあるが財力のない青年と、有閑階級の教養を身につけた女性との恋愛という設定は、ミドルトン・マリが指摘するように『イザベル・クラレンドン』『新クラブ街』(New Club Street, 1891)『追放の身に生れて』の三作品の主要部分を含めている。マリはそれらの青年たちを孤立させているものが彼らの貧困のみではないことを述べ、彼らを宿命的に挫折や孤立の運命に置く発想のなかに、その実生活での痛ましい出来事⁽¹⁶⁾に形成されたギッシングの想像力の本質を見ている。ギッシングの想像力のなかで、彼らはあらかじめ疎外され追放された者として烙印を押されている⁽¹⁷⁾というのである。

そうした宿命の一側面として、この青年たちに共通する特長は、ファイトとエネルギーの不足、とりわけ社会的次元での行動力の欠如である。自分を疎外する社会に足場を求め、その悪を正していこうというような野心は彼らには無縁である。彼らは絵画や文学という個人的世界に閉じこもるが、そこにおいてさえ堅固な確信や持久力が彼らを支えるわけではない。『イザベル・クラレンドン』の主人公キングコートはおよそ人間の寄り集まるところを嫌悪して、田舎の一軒家で世捨人のような生活を送る。絵にも文学にも打ち込むエネルギーを欠いた彼はデイレットアントでしかなく、無用の長物である自分の教養を自嘲している。『新クラブ街』の小説家リヤードンは仕事に行きづまって小説

が書けなくなったとき、週二十五シリングで病院の事務員となり、ひたすら生活規模を縮少することを考える。友人と会って古典の話をし、ギリシャ旅行を夢みるのが、彼の楽しみの全てとなる。『追放の身に生れて』のピークは、それとくらべてエネルギーで行動的な印象を与えるが、その野心や策略の動機は、自分の感性の必要を満たしてくれるような洗練された教養を身につけた女性を伴侶に得たいという、ささやかな個人的願望にすぎず、その点ではせいぜい安楽で優雅な暮しを確保することを人生の目的としている『新グラブ街』のもう一人の主人公ジャスパール・ミルヴェインも同様である。

これらの青年たちの相手として設定された女性たちは、その物腰の優雅さや恵まれた暮らしにもかかわらず、はるかに堅実な生活感覚の持主である。人生にたいして彼女たちは逃げ腰ではない。互に苦境に立ったとき、結婚して一緒にそれに立ち向いましょう、とイザベラ・クラレンドンは言う。（キングコートは拒否する。）有望な小説家としての夫に託した夢がついえた苦々しさや貧困の恐怖にかられて夫エドウィン・リヤードンをなじる妻エイミイは、決して献身的な天使ではないにしても、彼女の行動を例えばハリエット・スメイルズのような品性の卑しさに帰することはできない。エイミイは普通の生活感覚を持った普通の女なのである。エイミイとエドウィンとの葛藤は、学究的で世渡りの下手な夫と、虚栄心や物質的執着が強く夫にたいして無理解な妻という、おそらく作者が意図したパターン以上に、弱い男と強い女という関係に還元でき、読者の道徳的判断をよりニュートラルな立場にとどめる。先にあげた三つの作品のなかのいくつかの恋愛や結婚が不幸な道筋を辿るその成りゆきは様々で、一般化した要約は不可能だが、強いて共通項を探すならそれは女性の冷淡や無理解よりもはるかに、それぞれ異なる形であらわれた男性の弱さ、疎外された状況によって生れた彼らの視野の卑小さだと言えるように思う。そしてあえて恋人や妻を自分の運命に巻き込まず、自分だけの世界に沈潜しようとする姿勢が、相手の独立を尊重するというフェミニズム的態度への傾

斜を内包していることは後で述べたい。

病院の事務員になることを決めたエドウィン・リヤードンが妻になじられて度を失い、夫である自分の考えに従えと高圧的な態度に出るところがある。

「あなたがいいと思ったとおりにしろですって？ おやまあ！」

これが一体エイミイの声だろうか。何ということだろう！ 丁度こういう声の調子で女が街角で夫と口論しているのを聞いたことがあった。ああいう世界の女とこの世界の女とのあいだに、本質的な違いはないのだろうか。こんなに似つかぬ表面の下に同じ性質がひそんでいるのだろうか。⁽¹⁸⁾

かつては自分の理想の女性だった妻のなかに、道で口論する下層の女と同じ声を聞いてリヤードンはたじろぐ。自分の想像のおよばぬものが彼女のなかにあることを実感する啓示の瞬間である。その声に対抗するには暴力をふるって黙らせるほかないだろう。しかしリヤードンは喉がつまり、息をつこうと喘ぎ涙を流した、とギッシングは書いている。リヤードンをたじろがせたものは、エイミイの世俗的な生活力とでも呼ぶべきものだったが、そうした啓示の瞬間は全く別の形でも訪れ、しかも同じ。パターンの描写を生んでいることを『はんぱ者の女たち』からの一節を引用して注目しておきたい。

「ああ、エヴァアード」

これがローダの声だろうか。低く優しく愛撫するようなこの声が。それは彼を戦慄させた。そして自分自身の愚

かさを胸のうちで嘲笑しながら、あらゆる思いを情欲パッションのなかに燃え上らせて彼は彼女の方を向いた。⁽¹⁹⁾

知的な女性解放の運動家ローダ・ナンをここで変貌させ、彼女の恋人エヴァラード・バーフットを戦慄させるものは、彼女の激しい性的な情感、ギッシングの言うパッションである。小説が女性に性的な感情を一切認めなかったデイクンズの時代は過ぎ去っていたが、両性がパッションの世界でも互角となったとき、それが調和的な関係を導くよりもむしろ男女の戦いを生むことを見て取っていたギッシングはここにも別の形の葛藤を潜在させているのである。ローダとエヴァラードのあいだのエゴとエゴの戦いは、このローダの変貌をきっかけに激しさを加えてゆく。

これがエイミイの声だろうかと自問するリヤードンも、これがローダの声だろうかといぶかるバーフットも、共に女性のなかの底知れぬものを垣間見ておののく。女性たちはそのたくましい生活感覚と、鎖から放たれた肉体で男性たちの観念に住む女性像を超えはじめたのである。作者ギッシングの観念さえも。というのは次節で見るように、少なくとも観念の上では、自然の法則によって知力、体力において女性の優位に立つ男性が、教師となって女性に人生の指針を示し、導いてゆくがあるべき本来の姿だと、ギッシングは考えていたように見えるからである。作家としての直観が、彼の観念以上の人間の姿を捉えたと言うべきだろうか。以上に見たような男女の葛藤のなかには、そうした理想の師弟関係の前提を崩すものがすでに存在している。

(五)

教師と生徒というパターンは、理想的な男女の関係を描く際に、英国小説が伝統的に依存したパターンのひとつである。すぐれた資質、先見、判断力を具えた男性が精神的指導者となって、女性にその弱点や誤りに気付かせながら

暖くその精神的成長を見守る。指導者への尊敬と生徒への愛情が多くの場合、幸福な結合をもたらすのである。エマとナイトリイ氏（『エマ』）、シャーリイとルイ・ムア（『シャーリイ』）、アミーリヤとドビン（『虚栄の市』）、ジャネットとトライアン（『ジャネットとの悔悟』）などが思い浮かぶ。

女性の解放をテーマにした小説が相ついで現われた一八九〇年代にも、このパターンは意外に根強く残っていたように見える。例えば一八九五年に出て当時のベストセラーとなったグラント・アレンの『やり遂げた女』（*The Woman Who Did*）は、結婚が女性の隷属状態を導びくと考え、結婚という手続きを排して私生児を生む女性ハーミニアの悲劇を描いたものだが、ハーミニアの「新しさ」にもかかわらず、彼女とその恋人アランの關係に師弟關係が重なっていることは次のような箇所にはつきりとあらわれている。

自分に依存する女にたいして大部分の男は教師の役を引き受けるものだが、ハーミニアははじめて、それについては終始アランを教師としてあおぐことができるような全く新しい主題を眼のあたりにした。支えられて安らい、しっかりとよりかかっているという感覚は、彼女にとって新鮮で喜ばしいものだった。男を尊敬するのは女の昔からの役割である。女はそうするとき最も幸福なのであり、その幸福は長く続かなければならない。そしてハーミニアはこの点で自分が充分に女であることを知って、それを悔い⁽²⁰⁾なかった。

女性の解放を唱えながら、それが女性の「昔からの役割」に及ぼす影響や、それがもたらす人間關係の變化を追求しないとしたら、新しい酒を古い革袋に入れるようなものであろう。『はんば者の女たち』やハーデイの『日陰者ジュード』（*Jude the Obscure*, 1895）は、当時のフェミニズム小説のコンテクストにおいて眺められるべき小説だが、

少なくともこの二つの作品はより遠いところまで見ている。女性のなかの底知れぬものの前におののく男性はもはや教師たり得ないし、男性の弱さを責め、あるいはパッションでとりこにすることで相手を屈服させようとする女性は生徒たり得ない。

しかしながら、ギッシングが師弟関係のパターンを使って幸福な男女の結びつきを描かなかったわけではない。むしろ幸福な結末に至るギッシングの数少ない男女の關係に、このパターンが内在していることは、彼がそれを男女の理想のあり方と考えていたと推測する充分な根拠となる。また彼の描く男性の多くが、女性にたいする男性の自然法則的優位を信じていることも事実で、それを基盤にギッシングの女性輕視を批判した論もあるが、⁽²¹⁾実際に彼らが女性たちの指導者たり得ているかを作品にそくして検討する方が先決であろう。

『解放された者』(The Emancipated, 1890) は主人公ロス・マラッドが、精神的指導者となって彼を慕うミリアムを真に解放された女性へと導ぶく話である。解放の第一歩は知性と感性の解放で、偏狭なピュリタニズムと世俗的な虚栄心に支配されたミリアムは、旅行先のイタリアで美術に接し、進歩的な考え方を持つ人々に交り、就中、風景画家マラッドに啓蒙されるうちに、次第に古い自分を脱却してゆく。彼女の感覚は美術や文学の与える喜びにむかつて解放され、同時に精神的指導者であるマラッドに惹かれはじめる。

しかし彼女には達成しなければならぬもうひとつの解放があつて、それはパッションの盲目的支配からの解放である。マラッドを愛するようになった彼女は、嫉妬にかられるという形でパッションの奴隷になる。マラッドと他の女性との仲を疑って、彼のフラットのあたりをうろつき、人の出入りを見張ったりする。彼女のそうした異常な行動について知ったマラッドは再び指導者として彼女を導く。彼が教師たり得るのは、彼自身かつて、現在はミリアムの弟ルービンの妻となつているシシリイへの愛に苦しみ、それを理性で克服したからである。彼はミリアムをモデルに

して自分が描いた理想的な女性の肖像を彼女に示して言う。

「これは教育された女、自分と世界について充分に知った女性ですよ。彼女は使い古された言葉の真の意味で「解放されて」いる、つまり精神や心の動きを麻痺させてしまふ束縛から解放放たれているだけでなく人が生まれつき持つていて、人を奴隷にしてしまふパッションを制御することもできるのです。そして僕はこの女性を愛します⁽²²⁾。」

知性の解放と盲目的な性的情熱からの解放とを経た者が真に解放された者であるというテーマが明示された部分である。二つの解放を達成したミリアムはマラッドと結ばれ、彼が仕事に専念できるよう気を配る献身的な妻になる。おそらくそれはギッシング自身が理想とした夫婦のあり方だったのだろうが、マラッドとミリアムの二人が、彼らと対照的な破滅型の夫婦ルービンとシシリイにくらべて存在感を欠いていることは否めない。ギッシングはしばしば、ケース・スタディのように複数の男女の組み合わせを設定し、同じ比重を持たせながら話を進行させるのだが、ほとんどの場合に幸福な男女の存在感が薄いのは、作者の体験の重みのあらわれだろうか。

マラッドとミリアムの理想的な関係が説得力に欠けるのは、マラッドに指導者たるにふさわしい強靱さが欠けているためである。二人がヴァチカンを見て歩く章に「学ぶことと教えること」という題がつけられていることから、作者がマラッドを教師として是認し、また強い男だけがミリアムを救えるとルービンに言わせていることからも、マラッドを強い男として描いていることは明らかである。確かにミリアムを容赦なく詰問し、彼女を自分のフラットに呼びつけて縫物をさせ、お茶を入れさせ、もう用がないから帰れと言うマラッドは強い男のように見える。しかしそれが実は弱さの裏返しであることに気付くのにそれほど長くはかからない。

僕が女性を愛すると言っても、決して女神のようにあがめるつもりはないし、彼女が僕の生涯の仕事の邪魔をしたらそれを大目に見るつもりはない、とマラッドは言う。⁽²⁴⁾彼の生涯の仕事とは無論絵を描くことだが、ひたすらそれに打ち込み、妻さえもその領域に踏み込ませまいとする姿勢に終始ひとりよがりなものが感じられるのは、彼の芸術の社会的伝達の場合がきわめて狭いからである。自分の作品が世間に広く知られ、それをよい値で売るために必要なショウマンの素質に彼は欠けている。個展のようなものを嫌い、絵を買いたいという申し出をおそれる。⁽²⁵⁾世間的なしきたりになじまず、ごく少数の人間としかつき合わない。そうした彼の性癖を、世俗を超えた高潔さとして印象づけるのが作者の意図なのだが、むしろマラッドの造形全体から感じられるのは、およそ人間的な生々しいもの、欲望、野心、闘争などにたいする彼の怖れと逃避である。性の情熱への恐怖も無論その一部で、パッションからの解放はそれへの恐怖に促されていることを次のような箇所が暗示する。作品の最終章、結婚後数ヶ月を経たマラッドとミリアムが、ルービンと別居したシシリイについて話している。

「どんな種類の仕事だっていいが、シシリイが芸術家だったらよかったと思うよ。(中略)歌ったり演奏したり、文を書いたり絵を描く女は自由な生活が送れる。しかし女でしかない女というのは、こういう場合にどうなるのだろうか。お前にしたってもし僕がお前を邪魔だと思ひ、自分の仕事を見つけてくれと言ったらどうなるだろうね」

「近くにテムズ河がありますわ」彼女は愛のこもった眼に火のような輝きを浮べて彼を見て答えた。⁽²⁶⁾

「女でしかない女」を負担に感じ、できることならその全存在で自分によりかからないでほしいという潜在意識がマラッドにはある。そんな彼にむかつて、追い出されたらテムズ河に身投げする、と「火のような輝き」を眼に浮べ

てミリアムが答えるとき、ここにも弱い男と強い女のパターンが浮き出す。教師と生徒のバランスは実に危ういのである。

指導者の力を借りずに、自分一人の努力で解放を成し遂げる女性に『女王即位五十年祭の年に』のナンシイ・ロードがいる。盲目的なパッションにかられてタラントと結ばれ、妊娠するあたりまでは、ナンシイも普通の愚かな娘にすぎないが、結婚を秘密にしたまま半ば捨てられたような形でタラントがアメリカに行ってしまったあと、彼女は内省によって次第に彼への愛を昇化させてゆく。ギッシングの作品をとおしてナンシイは普通の女から理想的な女へと変貌をとげる唯一人のヒロインだと、ミドルトン・マリは述べているが、やがてアメリカから戻ったタラントが、互の自由と快適さのために、一定の収入が得られるまでは別々に暮すことをナンシイに納得させるあたりでは、これもマリが言うようにタラントがいかに薄っぺらない気な人間に見え、ひたすら彼の意に従うナンシイが馬鹿げて見えてくる。自己認識の深さ、愛する力の強さにおいてナンシイはすでにタラントをはるかにしのいでいるのだが、そのナンシイにむかって「確かに僕は知力、体力の点で君よりすぐれている。この事実をごまかすわけにはいかない」とタラントが自分の信念を被歴するとき、その滑稽さがナンシイにたいする読者の共感まで損う。ギッシングの女主人公たちのなかで、例外的に幸福な結末を与えられているナンシイとミリアムにおいてさえ、彼女たちの成長がその枠組のなかで構想されているところの師弟関係のパターンは破綻している。

(六)

実際ギッシングの女性たちの最大の不幸は、教師を失った生徒の不幸である。教師を必要としながらそれを見出し得ない生徒の、教師と対等になってしまった生徒の、その精神力において教師をしのいでしまった生徒の、不幸であ

る。彼女たちは師弟でもある男女というパターンにかわって、積極的な人間関係を実現し得るようなパターンを、作者によってまだ与えられていない。例えば女性同士の連帯も、師弟関係にかわる両性間の関係も、まだ作者の視野のなかにはない。

ハリエット・スミイルズやエイダ・ピーチイのような無知で恥しらずの女性たちは、強烈な嫌悪感を読者にもよおさせるにせよ、残す印象は静的である。アリス・マドンやヴァーニア・マドンのような哀れな老嬢たちにしてもその点は同じで、その人生にもう何も変化が起り得ない彼女たちの姿は、静的な最終性ともいうべきものに閉じ込められている。変化に富む表情を最も鮮やかに見せ、われわれの想像力に残照のようなほてりを残すのは先に述べたような不幸を背負った女性たち、成長の可能性を秘めながら試行錯誤のうちに破滅する女性、あるいはその成長が決して幸福な人生をもたらさなかった女性たちである。

彼女たち、とりわけ試行錯誤の末に破滅する女性たちの描き方に、それ以前の英国小説がいわゆる身（フーエルン・ウーマン）を誤った女を描く際に用いた常（コンヴェンション）奪手段の影響が見られるように思われることも述べておきたい。白いハンカチをさしのべながら血にまみれて倒れる『オリヴァー・ツイスト』のナンシーに代表されるような、墮落した女にたいして英国小説が与えるきまりだったパセティックな結末が、マグダレンたちにたいする認識や、彼女たちの現実的救済にもなって色あせてしまったとき、それにかわるパセティックな効果を、ギッシングは先に述べたような女性たちの上に無意識的に移行させたように見える。そんな推測を許すのは、彼女たちの死がおうおうにして持つ不自然さである。コンヴェンションは常にリアリズムの地肌を乱す危険をはらんでいるが、彼女たちのやや必然性に欠ける死のなかに時々それが露呈する。

『はんば者の女たち』のモニカ・マドンはそのよい例だろう。彼女はヴィクトリア朝的意味ではなく、より現代的

な意味で身を誤った女である。彼女は例のアリスとヴァージニア・マドンの妹だが、姉たちのような老嬢の生活に強い恐怖を抱いている。ローダ・ナンの勧めでそれまで働いていた服地店をやめ、職業訓練の学校に通うがあまり身が入らない。偶然知り合った四十すぎのエドマンド・ウイドウスンという男に求婚されて結婚する。愛情を抱いたわけではなかったが、年収八百ポンドの紳士との結婚は玉の輿を意味した。モニカのこの社会的上昇は、しかしローダのように女性の独立を唱える立場から見れば墮落である。いわゆる墮落した女の正反対のコースを取っているにもかかわらず、結婚後のモニカの動かし方が、身を誤った女の描き方の定石にそって進められているのは、作者に幾分かローダの意識が重なり、また作者が無意識に小説のコンヴェンションに支配されたためと思われる。

結婚後ウイドウスは極度に妻の自由を束縛する。彼は女性は家庭の女王であるべきだと主張するラスキンの信奉者で、妻を家庭に封じこめ、自分は保護者として妻を監督しようとする。妻の反抗は彼を狼狽させる。⁽²⁹⁾

女性は常に生徒という身分に生れついていると彼は考えていた。(中略)彼自身、文明の曙このかた、女が未成年期を越えることがないように充分な配慮をしてきたところの、女性の保護者、妻の所有者を代表していた。彼の立場の苦渋は、彼が娶った女が否応なしに人間としての彼女の要求を彼につきつけるという事実のなかにあった。⁽³⁰⁾

一方、モニカは自分に言い寄るビーヴィスという若い男に心を動かし、その許に走ろうとするが、土壇場になってビーヴィスが逃げ腰になる。ヴィクトリア朝的意味では「身を誤らずに」済むのだが、ローダ的視点からは重ねて身を誤ったわけで、恰もその烙印が決定的なものになったかのように、このあたりからモニカの死の予感(彼女の病気の正体は読者には不明である)がくり返し語られるようになる。しかも罪を悔いるマгдаレンの言葉遣いで語られて

いる。

彼女にはどんな償いができるだろうか。精神の健康を得るどんな道を見出せるだろうか。⁽³¹⁾

そして彼女はローダに会いに行く決心をする。強い女ローダだけが自分を理解してくれると彼女は思う。不幸な（そしてありそうもない）偶然が重なって二人の間には深い溝が生じている。モニカに言い寄ったのが自分の恋人バートだとしてローダが人から聞かされているためである。モニカは自分の恥をさらすのを覚悟の上で、ローダの誤解をとくべく釈明をする。

ウイドウスンに失望し、ビーヴィスに裏切られたモニカを、誰かが支え得るとしたらそれはローダであろう。だがローダとモニカのあいだには、ウェイマークとキャステイ、リヤードンとビフエン等、男性の友人同士の友情の濃密さが生れる気配がない。誤解がとけた後、ローダは迷える羊が自分たちの許に戻ったことを喜ぶものの、モニカが夫とのさしせまった問題で助言を求めると、あえてそれには立ち入ろうとしない。死の予感を口にするモニカを元気づけるものの、恰も彼女の望みはモニカを通りこしてモニカに宿っている新しい生命（モニカはウイドウスンの子を身ごもっている）に託せるかのように、もっぱら生れてくる子のために健康を回復するようにと強調する。⁽³²⁾

女性同士の連帯感の欠如は、同じ大義のために働いているローダとメアリー・バーフットの場合に、さらに顕著である。メアリーの従兄でローダと恋仲となるエヴァラードの存在が、二人の女性のあいだに互にたいする潜在的警戒心や猜疑心を生んでいて、これは例えば共にアイダ・スターに心を寄せながら、そのことがウェイマークとキャステイの友情をいささかも損なわないのと対照的である。ギツシングの女性たちは、男性との関係においてのみ、その人

生のひろがりを与えられているように思われる。

モニカの悲劇は、彼女が適切な指導者たるべき男性に出会っていたならば避けられたであろうという印象を与えるが、ローダとバーフットの恋愛は、女性解放の行きつく先が必然的に師弟関係の解体であることを示している。バーフットはローダの運動を支持し「誇り高く、知的で、真剣な」⁽³³⁾ローダにほぼ自分の理想に近い女性を見る。しかし彼の愛情は彼のなかで次のような感情と結びついている。

彼女の精神の独立を喜びながら、彼はしかし、彼女が自分に完全に服従することを、理性をかなぐりすてたパッションを彼女のなかにかきたてることを欲した。⁽³⁴⁾

彼が人一倍すぐれた知的な女性に執着するのは、そのような女性を足もとに膝まづかせる快感が得たいためである。だが理性をかなぐりすてたパッションをローダのなかにかき立てたとき、彼はそれ以上に自分が彼女に支配されてしまうのを知る。ローダの愛をためそうと、結婚という形式によらない結びつきを提案した彼は、彼の愛の確証を得ようと結婚の形式を求めるローダに譲歩する。だから例のモニカをめぐって事実無根の疑いをローダが抱いたとき彼は故意に釈明をせず、ローダを苦しめることに快感を味う。誤解がやがてとけたときローダが全面降服して許しを求めに来ることを彼は期待するが、ローダは彼に誠意があるなら釈明をすべきだったとこだわる。こうして相手を服従させようとする互の意志が平行線をたどったまま二人のあいだはこじれてゆき、最後にローダは苦しみを乗り越えて自分から幕を引く。

出産後のモニカが、例の正体不明の病気で（不自然に）死んだあと、ローダがその遺児と対面する場面で小説は終

っている。そこでローダが語る希望に満ちた言葉とは裏腹に、作品が残すのははなはだ荒涼とした世界の印象である。ギッシングの命名法については前に触れたが、ローダ・ナン（尼僧）バーフット（遮断する棒）ウイドウ・スン（寡婦）などいづれも孤立を連想させる名前がその印象を強める。女性が自我に目覚め、男性にむかつて師弟の関係を否定したとき、両性のあいだにどのような調和的關係があり得るか、という重い問題に『はんば者の女たち』は期せずして触れ、なんら積極的な解答は見出していないように見える。

(七)

『渦』の女主人公アルマ・ロルフの破滅も、教師を失った生徒の悲劇だが、アルマの描写にはモニカの場合のような作為が目立たず、それだけ作者の円熟を感じさせる。事実『渦』はギッシングの長篇小説のなかでは最後の作品で、作家的技倆と共に作者が練り上げた人物の配置がそのなかにはあるように思われる。ギッシングが描いた多くの女性たちの不幸がアルマに集約されているように、極端なペシミストであると同時に、妻の独立を徹底して重んじるという意味でのフェミニストであるハーヴェイ・ロルフの中に、それまでのギッシングの多くの主人公が潜在的に持っていた性格が、より明確な輪郭を与えられている。

小説の冒頭でロルフは三十七才、遺産によつて九百ポンド余りの年収を持つ彼は働く必要がない。貧困が孤立の本質的原因ではなかったことを立証する⁽³⁵⁾ように、彼には財産があり、破産した銀行家の娘アルマは一文なしであるというように、ここでは以前の作品に見られた關係が逆転している。ロルフの眼に世間は低俗な野蛮さと過度の洗練の両極分解を起していると映じ、その中に自分の活動の場を求める気持は毛頭ない。「女も世間も放⁽³⁶⁾っておけ！」アルマに心惹かれ、自らの主義を裏切る形で結婚した後、彼が互の独立と不干渉に執着するのもそうした隱遁的姿勢の延長

である。

「僕は僕の作ったどんな鋳型にも君をはめこみたくない。君には本当の君自身であつてもらいたいし、君の人生を送ってほしい。」⁽³⁷⁾

しかしアルマには、実現すべき確固たる目標があるわけではない。プロのピアニストになることが彼女の野心だが、音楽にたいして真の情熱を持っているわけでもない。⁽³⁸⁾世間の低俗さを批判するが、それも漠然と当世風のことを口にしてみるにすぎない。⁽³⁹⁾結局彼女を動かすものは同性の友だちにたいする競争心や虚栄心で、それが彼女を不幸な事件に巻き込み破滅に導びいてゆく。

デビューのコンサート準備に狂奔するアルマの言動が、家庭の平和を深部まで乱してゆくにつれて、ロルフの隠遁主義には次第にペシミズムの色が濃くなる。人間同士が寄り合う限り、平和はないと彼は諦観のなかで思うのである。

人生への恐怖が彼の心に最も重くのしかかるとき、彼はさほど長くない時間の経過の後に、彼や彼の愛した者たちは恰も全く存在しなかった如くに地上から消失するのだということを、⁽⁴⁰⁾（中略）悩みに満ちた光の瞬時のまたたきは永劫の忘却の中に消えるのだということを思つて自らを慰めた。

遮二無二行動するアルマは、こうしたペシミズムとは無縁の、人生をおそれない女である。彼女の感覚は「渦と輝

きの中に消える人生の喜び⁽⁴¹⁾」を追い求める。キングコートとイザベル、あるいはリヤードンとエイミイの年令や社会的立場をロルフとアルマのそれに置き変えたなら、すでにそこにロルフとアルマの原型が存在していたことがわかるだろう。「ああ、彼がこんなに弱くなかったら！」とイザベルが嘆いたように、⁽⁴²⁾アルマは教師が身近かにいながら手をさしのべてもらえない生徒の不幸を漠然と感じる。

情熱的な性の行為にもかかわらず、夫婦としての思いやりや親しさにもかかわらず、彼女にたいする彼の態度は変らなかった。彼は依然として、心からの賛美というより寛容のまなざしで彼女を見ていた。⁽⁴³⁾（中略）アルマは夫がふんだんに認めてくれる自由と独立に、心の底では不満だった。

この小説の表面だけを掬って、作者の女性蔑視や女性の独立にたいする偏見を見るのはおよそ歴史的感覚を欠いた態度であろう。女性解放をテーマとした小説においてすら、女主人公が男性のなかに教師を求めていることを思えば、むしろ目を向けなければならぬのは導き手たることを放棄したロルフであろう。作者が彼のなかに底の深いペシミズムをくり返し描いていることを読み落してはならない。それが全ての悲劇の根である。

主人公のペシミズムがいばば極限まで押しつめられたこの作品のなかに、それまでギッシングの作品のなかに見られなかったようなタイプの女性が登場している。シビル（巫子）という暗示的な名前を持つその女性は、ロルフの親友カーナビイの妻だが、美しく優雅で愛情深い妻と見える彼女は、実は夫を裏切って他の男と関係を持ち、しかもそれを完全に隠蔽して、不義の関係を持ったのはアルマだと周囲に信じさせてしまう底知れぬ悪女である。アルマはもとより、男性的な行動力の持ち主カーナビイも、それとは知らずに彼女に翻弄されている。

最後まで傍観者の立場を離れようとしないうろふにむかつて、アルマはシビルの正体を必死にわからせようとする。

「ねえ、どうか一言私の言うことを信じると言ったださらない？ 私のことじゃなくって、（中略）あの人（シビル）のことです。信じると言って。」

彼は躊躇した。男の全ての常識が彼女の懇願に反抗した。だが彼女が嗚咽で震えているのを見て彼は譲歩した。「いいよ、それも信じるよ。」

（中略）

「二度と疑ったりなさらないわね。」

「疑わないよ。」

「ああ、あなたはいい方だね、私にやさしくしてくださるのね。そして私を少し愛してくださらない？ ほんの少しでいいの、愛してくださることができるかしら？」⁽⁴⁵⁾

少しでいいから愛してくださいという、三文小説的な表現はしかし、アルマの限界を示すと同時に、すでに遅くなりすぎてから、指導者の必要を悟ったことの彼女なりの表現だと読めるだろう。その夜アルマは睡眠薬を飲みすぎて死ぬ。

そんなアルマと対照的にシビルは全てを見通している。アルマの野心に攪乱される親友ろふの生活を心配する夫に彼女は言う。

「あなただって同じことでしょうよ。妻を殴る勇氣のある男は別として、それが男たちの運命ですわ。あなただってそうしたくはなかったのに私のあとを追って、のこのこと英国に戻って来たぢやありませんか。もう少し力を持って、妻をひっぱたく練習をなさったら——」⁽⁴⁶⁾

「実際の心のうちは微かにでもほのめかすことなく、相手を見てはおえむことのできる謎の女性」⁽⁴⁷⁾シビルの登場は何を意味するのだろうか。男性が人生をおそれ立ちすくむその時点で、彼女が登場することに、ある符合が漠然と感じられることだけを言っておきたい。もしかすると二十世紀の小説に姿を現わすミステリアスな女性たち、男性の感覚のみならず、その精神、その存在までもゆさぶるような女性たちが、ここに予知されているのかもしれない。

注

- (1) 二作品の類似はすでに指摘されている。Cf. Patrick Parrinder, "Introduction," *The Whirlpool*, The Harvester Press, 1977, p. xvi.
以下において特に断らないかぎり、ギッシングの作品への言及は、ハーヴェスター・プレス版による。
- (2) *The Whirlpool*, p. 386.
- (3) 「僕の不十分な収入では、最上の意味での結婚は不可能だ。教育のある英国の娘たちは結婚生活で貧困に直面しようとはしないから。そして彼女たちにとっては年収四百ポンド以下は深刻な貧困なのだ」とギッシングは手紙に書いている。
(Arthur C. Young, ed., *The Letters of George Gissing to Edward Bertz 1887-1903*, Connecticut, Greenwood Press, 1980, p. 112.)
- (4) *The Unclasped*, p. 163.
- (5) Cf. Frank E. Huggett, *Life Below Stairs*, London, John Murray, 1977, p. 70.
- (6) Young, ed., *The Letters*, p. 151.
- (7) *Charles Dickens*, New York, Kennikat Press, 1966, p. 157.

- (8) Jacob Korg, *George Gissing: A Critical Biography*, Sussex, The Harvester Press, 1980, p. 210.
- (9) *Charles Dickens*, p. 159.
- (10) *Ibid.*, 163-4.
- (11) *Ibid.*, 159.
- (12) Eric Trudgill, *Madonnas and Magdalens*, London, Heinemann, 1976, p. 287.
- (13) Marcia R. Fox, "Introduction," *The Odd Women*, New York, Norton & Company, 1971, p. vi.
- (14) Korg, *George Gissing*, p. 189.
- (15) *Born in Exile*, pp. 41-5.
- (16) マンチエスターのオウエン・カレッジの学生時代、年下の娼婦ヘレン・ハリソンに恋をし、彼女を救うために級友たちの金を盗んだ。発覚して懲役一ヶ月の判決を受けた。この事件のために前途有望な学徒としての未来は消え、またこの前歴を知られる怖れがその後の彼の行動を規制した。
- (17) J. Middleton Murry, "George Gissing," *Katherine Mansfield and Other Literary Studies*, London, Constable, 1959, pp. 9-20.
- (18) *New Grub Street*, Penguin Books, 1978, p. 261.
- (19) *The Odd Women*, New York, Norton & Company, 1971, p. 266.
- (20) Grant Allen, *The Woman Who Did*, Boston, Roberts Bros., 1895
- (21) Ex. Lloyd Fernando, 'Gissing's Studies in "V, vulgarity": Aspects of His Antifeminism,' *"New Women" in the Late Victorian Novel*, The Pennsylvania State Univ. Press, 1977, pp. 107-128.
- (22) *The Emancipated*, p. 438.
- (23) *Ibid.*, p. 449.
- (24) *Ibid.*, p. 438.
- (25) *Ibid.*, p. 316.
- (26) *Ibid.*, p. 447.
- (27) Murry, "George Gissing" p. 63.
- (28) *In the Year of Jubilee*, p. 414.

- (29) *The Odd Women* p. 153.
- (30) *Ibid.*, pp. 196-7.
- (31) *Ibid.*, p. 306.
- (32) *Ibid.*, pp. 317-8.
- (33) *Ibid.*, p. 176.
- (34) *Ibid.*, p. 261.
- (35) 其の參照。
- (36) *The Whirlpool*, p. 21.
- (37) *Ibid.*, p. 118.
- (38) *Ibid.*, p. 245.
- (39) *Ibid.*, p. 118.
- (40) *Ibid.*, p. 383.
- (41) *Ibid.*, p. 419.
- (42) *Isabel Clarendon*, Vol. II, p. 284.
- (43) *The Whirlpool*, p. 253.
- (44) Cf. Lloyd Fernando, 'Gissing's Studies in "Vulgarism"', p. 125.
- (45) *The Whirlpool*, p. 445.
- (46) *Ibid.*, p. 277.
- (47) *Ibid.*, p. 216.